

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「越後人のひとつ残し」

一般的に、新潟もんは、「しょうしがり」（恥ずかしがり屋）で、小心者と言われているらしいです。「らしい」としたのは、どこにも例外があるからです。実際、私のまわりでは、例外だらけであり、生粋の越後人のため「しょうしがり」で、小心者の私は、いつも「やっきやき」（いらいら、やきもきという意）しております。

とはいえ、昔から越後人は、奥ゆかしい県民とされ、それが美德と思われてきました。そんな越後人の性格をズバリ言い表した新潟版格言に「越後人のひとつ残し」というものがあります。

たとえば、人が集まった食事時、大皿に盛った料理が最後に一品だけ残るとします。この場合、本当は誰かさんが手をつけていなくても、その誰かさんはなかなか手を伸ばせないことが多いようです。これが、半ば公の会合などで、あまり普段親しくもない人で卓を囲んだ場合は、なおさらです。最後の一枚のローストビーフや一片の肉厚ふかひれ煮込み、最後の一貫の大トロ寿司、最後の一個のキャビアのセパイ…。これらに手を伸ばすのは、もってのほか！というくらい緊迫感がテーブルに漂います。

あらかじめボーイが取り分けてくれる場合はよいのですが、そうでない場合は、「越後人のひとつ残し」となり、テーブルに放置されたひとつ残しの料理は、衆人の見守る中、表面は乾き色は変わり、やがて次の料理が出てくる頃には片付けられてしまう運命にあります。

もし、このひとつ残しの掟を破ったとしたら、た

ちまち周囲から「どーお、あの人ったら・・・」と冷ややかな目で見られることに違いありません。それどころか、向こう二年は「最後のひとつ残しを食べた者」イコール「食べ物にいやしい人」と言われ、しまいには新潟弁で「ヤーシンボ」（食い意地の張った人）となるはずです。

現に海外生活が長かったという知人は、この掟を知らず、鴨のロースト最後の一枚、それも隣の人の「あてがいぶち」（割り当てという意味）を「待ってました！」とばかりにむんずと取って、むしゃむしゃ食べたために、「図々しい人」というレッテルを貼られてしまいました。げに恐ろしきは食べ物の恨みと言いたいところですが、これも、新潟人の控えめさと、周囲への気配りをみせる思いやりの心を表した話といってもよいでしょう。

また、「ひとつ残し」は、見ず知らずの旅人への配慮でもあったと言います。奥阿賀の集落では、道に迷った旅人や訪問者のために、必ず夕餉^{ゆうげ}のご飯とお菜は、一人前余分に作ってとっておく、と聞いたことがありました。まさにこれこそ「越後人のひとつ残し」です。

とかく自分のことで精いっぱいになりがちな日々ですが、「越後人のひとつ残し」の精神のゆとりと配慮も時には大切かと思いました。

